

ポルトガル語における haver と ter (I)

— Os Lusíadas の場合 —

森 本 英 夫

0. 序にかえて、恩師故小林英夫先生のことに触れることをご容赦願う次第である。

かれこれ 20 年ほど前の話、早稲田大学の図書館裏の道を隔てた路地にある喫茶店『エビアン』が、先生と私の読書会の場所であった。ここで先生から Camões の *Os Lusíadas* の手ほどきを授ったのである。額に油汗を流し、難解な数節を訳し終えると、先生は大版の大学ノートに書き込んで来られた訳を読み上げられる。そしてきまってその昔京城時代に金寿郷氏と一緒に読まれた時の想い出話をなされたものである。この読書会も私の就職によって中断、いや終わってしまった。その後先生にお会いした折、丁度岸本通夫先生から Ariosto の *Orlando Furioso* をご教示いただいていたのでその旨申し上げると、池上氏・松尾氏というポルトガル文学の専門の方と一緒にこの作品の翻訳に着手された旨のお話があり、またその一部がこの『ロマンス語研究』に掲載されもした。岩波書店から上梓が決った時の先生の嬉しそうな表情はいまも忘れられない。その昔先生が何とか出版されようと努力されたものの果されず、ガリ版印刷に終わったイタリアの詩人 Ada Negri の *Stella Mattutina* を、われわれの退屈さも顧みず朗読される時の淋しげな自己満足のそれとは比較にならぬ勝利の笑であった。そしてこの翻訳が先生の最後のものになってしまおうとは、海外出張中の留居宅に 6 月 18 日付で先生からの葉書が届いていた。まだ帰国していないだろうが、原稿を全部岩波に渡した。あとがきに私のことにも触れておいた、という内容のものだった。この葉書を読んだのは 8 月も終る頃であったが、先生がまた入院中であるとは露知らず、無沙汰をしてしまったのが悔まれてならない。何事にもきちんとされることの好きな先生、昇天される直前に校了になさっていたのはいかにも先生らしいと言わざるを得ない。*Os Lusíadas* の内容に擬して言えば、翻訳完成の儀を報告すべく、天上での神々の会議の席に召されたが、先生仲々の慎重派。途中で荒天に遭遇したり、邪心の妨害あって、御前会議に遅れてはならじと、旅立ちを早められた、ということになるか。謹んで先生のご冥福をお祈りする次第である。

小林先生の記念号を出すことに話が決った時、そんなわけで、どうしてもポルトガル語に関するものを書いて先生に献上したいと思ってはいたが、何一つまとまらずにお手上げになってしまっていた。いま記念号の第三集が奇しくも追悼号となるに及んで、私としても責任を果さざるを得ず、およそ研究論文とは言い難いものであるので、語学ノートとして発表させていただくことをお許し願いたい。

1. イベロ・ロマンス語に属するポルトガル語が、動詞に関して極めて特異な風貌を備えていることは、この言語を知る者の誰もが感ずるところである。まず第一点は複合時称形成の助動詞として haver と ter という 2 つの動詞が認められていることであり、第二点はラテン語の直説法過去完了形 (*amaveram*) が、その用法は別にして、直説法の枠の中に単純過去完了として参加していることである。この形態はスペイン語では接続法として生きているが、古期フランス語でも古い時期には可成りひんばんに用いられている (cf. *La vie de*

Saint Léger)。ラテン語の完了形がロマンス語に継承される場合、一般に体系上ロマンス語の単純形態の中に組み入れられ、新たに複合完了形が作り出されている。例えば、lat. AMAVI > fr. j'aimai → j'eus aimé ; lat. AMAVISSEM > fr. j'aimasse → j'eusse aimé。しかるにポルトガル語では接続法過去完了の *amavissem* (*amasse*) に関しては *tivesse amado* という大過去形を作り出しているが、直説法の現在完了 *amavi* (*amei*) および過去完了 *amaveram* (*amara*) については文法家によりまちまちである。例えば『四週間』にはどちらも認められてはいないが、P. V. Cuesta y U. A. M. da Luz の *Gramática portuguesa* では前大過去として *tivera amado* を認めているが *tive amado* については黙したままである (p. 364)。これが第三点である。第四点は、補語人称代名詞が、条件法および未来において、動詞語幹と語尾との間に割込むという現象で、これは古期カスティリヤ語に見られたものと同じ現象の生残りである (*Emprestar-no-lo-ia se tivesse*)。そして第五点は、本来人称形態素を持たぬ筈の不定詞に、人称形態素を有するものが存在するという事実である。これらはいずれも興味深い現象であるが、問題を第一の助動詞としての *haver* と *ter* に限ることにはしたい。

2. イベロ・ロマンス語では一般に *tenere* が *habere* より優勢であり、例えばフランス語なら *avoir* を用いて表現するところを *tenere* の出現となっている場合が少くない。j'ai faim. に対してスペイン語では *Tengo hambre*。またポルトガル語でも *Tenho fome*。となることなどその典型的例と言えよう。さらにスペイン語では動作を強めるために *tener* を助動詞的に用いて過去分詞と複合形態を作るという語法が知られている。*Tengo estudiado el asunto*。(=J'ai bien étudié l'affaire.) しかし慣用的語法として広く認められているものの、この場合の *tener* が助動詞体系の中に参加することは許されてははず、*haber* のみが複合時称構成の助動詞の役を果しているのである。他方ポルトガル語と、その兄弟のガリシア語とは、スペイン語と違って *ter* が助動詞の体系の中に入って *haver* (gal. *haber*) と競合しているのである。ところでこの *haver* と *ter* の関係はどうなのであろうか。

先に引合いに出した P. V. Cuesta y M. A. M. da Luz の *Gramática Portuguesa* では、*ter* が一般的な複合時称形成の助動詞であるとした上で、El auxiliar HAVER se utiliza en los tiempos de obligación y raras veces para la formación de los tiempos compuestos (p. 361) と *haver* を用いての複合時称形成を稀なものであるとしている。なおここで *obligación* というのは、例えば *Ontem havia de ir a Lisboa mas como estava doente não fui*。「昨日リスボンに行くべきところ病気のため行かなかった」に見られる *haver de inf.* を指すのであろう。このように *ter* が優勢で、*haver* は稀であるとしても、この両者が助動詞として全く等価値なのであろうか。星誠著『ポルトガル語四週間』では「複合時は次の如く助動詞 *haver* (文語體に)、*ter* (文語體及び口語體に) の変化に本動詞の過去分詞を添えて作る」(p. 191)とあり、*haver* が文語體の所管であることを言明している。極めて古い参考書ではあるが、いまだに版を重ねている Da Silva Dias の *Syntaxe histórica portuguesa* では *Os verbos ter e haver na formação dos tempos compostos não tem diferença de sentido* とまず意味上差違の無いことを述べた上で、次のように続けている。mas no port. moderno *haver* pertence, pode dizer-se, exclusivamente á linguagem selecta. (p. 107, §139) つまり、もっぱら

「擬った」言葉遣いに見られるということになる。Entwistle も *The Spanish Language* の中で Here Portuguese has gone further than Spanish by making TER its usual auxiliary and restricting HAVER to impersonal uses (save in the literary style)。 (p. 283) と、ter が通常用いられる助動詞だが、haver を文学的スタイルに用いられるものであることを付記している。またここで Entwistle が指摘している haver の非人称的使用にも留意しておこう。

このように現代のポルトガル語では、ter が複合時称形成の助動詞として主役を演じているのであって、haver はほんの脇役にすぎないのであるが、いったいいつごろから ter が優位を占めるようになって来たのであろうか。Posner は *The Romance Languages* の中で、複合過去に触れた箇所、Habeo cantatum = 'I have sung' : Rumanian am cântat ; Italian ho cantato ; French j'ai chanté ; Spanish hé cantado ; archaic Portuguese hei cantado (but now more frequently tenho cantado with the verb ter = 'to have, to hold' replacing old haver) (p. 159) と、古くにはポルトガル語も haver が普通に用いられていたことを意味する説明を与えてくれる。Elcock も *The Romance Languages* において、ラテン語期に、キリスト教関係の作家によって habēre + 過去分詞という形態が次第に用いられるようになって来たことを述べた後に、イベリア半島では habēre に対して 'to have' の意味を持った tenēre が競合していること、スペイン語では to have の意味の tenēre が見られるが、助動詞としては用いられないことに続けて、Portuguese, on the other hand, after long hesitation between haver and ter has finally opted for the latter. (p. 109) と記している。この文意から考えると、すでにイベロ・ロマン語期から ter が助動詞に用いられる兆候があり、ter が最終的に助動詞として haver を凌ぐに到るまでには、長い年月がかかったということになる。しかし tenēre + 過去分詞が文証される事実なのかどうか、また一体いつ頃 ter が優勢になったのかは明らかにされていない。この点に関して Ed. Bourciez の *Eléments de linguistique romane* にはラテン語期にイベリア半島では時折 tenēre と過去分詞が結びつく場合が例証されている (p. 269 § 246 b)。また Bourciez によれば、古期スペイン語も古期ポルトガル語も、habēre の方が tenēre より優勢であったが、次第次第に tenēre が侵蝕して行き、ポルトガル語では助動詞にまで及び、*Os Lusíadas* においては競争相手の haver が稀になってしまっているという。つまり ter と haver の争いが激しくなるのは、古期ポルトガル語期になってからであり、その勝敗の決するのは古典時代前ということになる。そこでこの ter と haver の交替劇の過程を、問題の *Os Lusíadas* から逆に遡上って、具体的に調べてみようというのがこの研究の目的である。

ところで、何故ポルトガル語だけに (そしてガリシア語に) この ter の助動詞への介入が起ったのか。今までに引用した研究書ではこのことに触れた箇所が見当たらない。その理由の中には、言語外の文化・社会的要因も十分考えられうるであろう。しかし筆者としては、この ter の増進的発達を許す主要な原因が、ポルトガル語の時称体系の内部にあると考えたいのである。

先にポルトガル語の時称体系に触れた折に、ラテン語の amavi および amaveram 由来の amei と amara には複合形態が認められにくいことを指摘して来た。このことは amei と amara に完了の意義が残されていることを意味していると言えるのである。従って、 amomei : amava-amara という対立が存在していることになる。その限りにおいてポルトガ

ル語は、他のロマンス語に比して、複合完了形が発達しにくい条件を備えていると言えよう。このような事情にあるポルトガル語は、*haber* よりむしろ *Lausberg* に従って言えば *semantisch stärkere Verbum* (*Romanische Sprachwissenschaft* III/2 Teil p. 221, § 856) である *ter* を助動詞として選び、特異な複合相を形成していくことになったのであるが、それは丁度スペイン語における *tener + p.p.* と平行した現象である。因みにポルトガル語と同列に置かれるガリシア語に関して、R.C. Calero は *Ter feito no es propiamente 'haber hecho,' sino 'tener hecho.'* (*Gramática elemental del gallego común*, p. 262) と述べているが、ポルトガル語にしても事情は大差あるまい。なお Calero はガリシア語におけるこの間の事情を次のように説明しているが、これも傾聴に値しよう。

El gallego antiguo concoció los tiempos compuestos con el verbo haber, pero el rendimiento funcional de este procedimiento gramatical de matizar el aspecto de la acción, dejó de ser económico cuando la estructuración conceptual de los fenómenos eliminó la consideración obligatoria de tal aspecto; y aquel procedimiento cayó en desuso, siendo suficiente, para los casos especiales que aún podían presentarse, el uso de la voz perfectiva. (Op. cit. p. 262)

3. *Os Lusíadas* に見出される複合形は次のようである。

a) *Ter*

- (1) *ter + p.p.* = 12 (I-24-5, III-27-6, III-94-6, V-27-1, V-47-7, V-100-5, VIII-3-3, VIII-4-6, VIII-9-5, K-19-1, K-21-2, K-86-1)
- (2) *tendo + p.p.* = 3 (I-29-8, V-8-1, V-13-7)
- (3) *tenho + p.p.* = 54 (*tenho* : I-79-½, I-81-3, N-79-1, VI-28-1, VII-83-5, X-145-1 × 2 ; *tens* : I-40-2, I-116-5, II-2-¾, II-62-1, VI-27-6 ; *tem* : I-16-6, II-31-7, II-110-4, III-17-4, III-40-2, III-76-4, III-81-4, III-86-3, IV-42-4, V-49-4, VI-50-6, VIII-1-6, VIII-5-7, VIII-6-5, VIII-10-4 × 2, VIII-49-3, K-5-2, K-77-5, X-67-2, X-70-6, X-78-4, X-102-6, X-108-4 ; *têmos* : I-51-1, I-51-4 × 2, II-31-3 ; *tendes* : I-4-½, VI-31-2, X-142-5 ; *têm* : I-28-5, I-29-1, I-79-3, I-80-1, II-76-4, VI-53-1, VI-71-1, VIII-5-8, VIII-82-7, X-68-2, X-123-4)
- (4) *tinha + p.p.* = 36 (*tinhas* : III-120-8 ; *tinha* : I-31-1, I-85-1, II-11-1, II-13-4, II-14-3, II-60-1, II-68-1, II-72-8, III-27-1, III-27-3, III-28-4, III-37-1, III-93-3, III-125-5, III-132-6, IV-4-2, IV-21-4, IV-22-4, VI-11-4, VI-17-7, VI-24-6, VI-48-3, VII-67-7, K-16-3, K-66-8, K-75-5, X-2-7, X-113-2 ; *tinhamos* : V-14-1, V-65-1 ; *tinham* : I-50-4, II-17-8, II-60-3, III-80-1, VI-58-3)
- (5) *tive + p.p.* = 1 (*teve* : I-32-1)
- (6) *terei + p.p.* = 6 (*terei* : K-40-7 ; *terá* : V-46-4, X-15-4, X-57-2, X-67-6, X-104-8)
- (7) *teria + p.p.* = 1 (*teria* : VII-24-5/6)

b) *Haver*

- (1) *havia + p.p.* = 1 (*havia* : I-49-6/7)

(2) *haja + p. p.* = 1 (*hajam* : I-74-4)

Bourciez の証言通り、*haver* の複合形は僅か 2 例しか見出されず、他面 *ter* のそれは 113 例となっている。しかし 8816 行に対する 115 という複合形の出現率は極めて低いものである。例えば古期フランス語の場合などでは、同じ条件で複合形は人称形に限ってみても、この 8816 行の作品であれば 1058 例という数値となる。いまポルトガル語で 2 つの時称に複合形が欠けていることを考慮に入れてその分割引いても、この *Os Lusíadas* に見られる複合形がいかに少ないかが分かる。

さて *ter* を用いた複合形 113 例のうち 12 例が複合不定詞、3 例が複合現在分詞である。

Que, depois de lhe ter dito quem era K-86-1

Tendo o termino ardente já passado V-13-7

これらを除いた 98 例が人称形であるが、最も多く見られるのは複合過去で 54 例。

A quem tem o Demonió leis escritas X-108-4

Se as armas queres ver, como tens dito I-66-5

次いで大過去が 36 例。

Meio caminho a noite tinha andado II-60-1

この 2 つの時称が殆んど大部分を占め、残りは未来完了に 6 例、条件法過去に 1 例、そして極めて興味深いことであるが、複合形が認められない筈の *tive + p. p.* が 1 例である。

Vê que já teve o Indo sojugado 1-32-1

この例に対してスペイン語訳は *Al consideran que tuvo el Indo subyugado* と *tener + p. p.* で訳出している点面白い (*Los Lusíadas*, Espasa-Calpe, S. A.)。なお接続法では複合形は見当らない。

一方 *haver* の複合形は次の 2 例である。

Do licor que Lieu prantado havia

Enchem vasos de vidro ;... I-49-6/7

Que tamanhas vitórias, tão famosas,

Hajam os Portugueses alcançado

Das indianas gentes belicosas 1-74-2/4

このような *haver* の後退は、単に複合時称形成の面のみではなく、本動詞としての用法にも現われている。この *Os Lusíadas* では *haver* は、

Destes Anrique...

Portugal houve em sorte, que no mundo III-25-1/3

のような *recevoir* の意味、あるいは *haver vista*, *haver medo* といった熟語的表現、

Que, se não me ajudais, hei grande medo VI-78-7

Até que houveram vista do terreno X-144-3

といったもの、あるいは *haver por*, *haver de inf.* といった表現に限られてしまっている。

Que, havendo por verdade o que dizia I-97-7

E que hão-de ser por isso agui punidos II-25-8

そして *haver* はもっぱら時間および存在を示す非人称として命を永らえている。

Que tanto tempo há já que vai buscando VI-5-4

以上 *Os Lusíadas* における *ter* と *haver* を調べて来たのであるが、一般的に複合形が極めて少なく、その上ある特定の時称に集中しているという特徴に加えて、Bourciez が言っているように *haver* を用いた複合形は全く少なく、既に *ter* が助動詞として確立されていること、更に *haver* はその本来の意味領域も *ter* に侵蝕されて、非人称的用法に凝固していることが分った。つまり Camões の時期には既にポルトガル語は現代化してしまっていると言えるのである。そこで次にいまま少し古い時期の作品においてこれを調べてみたい。

〔なお分析に使用したテキストは Luís de Camões : OBRAS COMPLETAS com prefácio e notas do prof. Hernani CIDADE, Volumes IV e V *Os Lusíadas*, Livraria Sá Da Costa, Lisboa, 1956 である〕

(25-XI-1978)